

福井県支部

福井県各地域における観光の現状と観光ビジネス活性化に向けた調査研究 ～県内各地域における今後の取り組みに向けて～

人口減少社会に向かう地域経済において、活性化のキーワードとして「交流人口の増加」をテーマに取り組む自治体も多いが、この「交流人口の増加」を端的にあらわした言葉が「観光」である。

しかし、地方自治体や地域において観光振興は、従来型の観光地（景勝地、自然資源、史跡）への集客に頼ったものであり、新たな観光資源の開発や掘り起こし、情報発信に向かっていなかったというのも現状である。

観光の地域に与える経済効果は、交通や宿泊、飲食、土産品購入などの観光消費による直接効果だけでなく、域内他産業への波及効果も大きなものがあり、特に観光の特性として「もてなす人」の雇用創出効果が最も大きなものといえる。一方で、県内の観光ビジネスの現状をみると、宿泊業では「観光行動の変化への対応遅れ」が、土産物等販売業では「観光対象施設への一方的な依存」が、飲食業では「観光目的につながるメニューづくりの遅れ」が見えられ、国内観光ニーズの変化への対応が進んでいない。

この変化に対応するため、全国的に、地域固有の資源を発掘し見つめ直し、住民自らが自分の言葉で地域の生活を伝える取り組みを始めてきており、これをスタートとして「着地型観光」商品開発への取り組みも活発化してきている。観光の波及効果を考えると県内の各産業の掛け算による「第六次産業」と捉えたトータルコーディネートが必要となっており、この実現によって「着地型観光」商品化による地域経済の活性化が実現されていくのではないだろうか。

今年度の調査研究では、福井県内各地域の観光活性化に向けた取り組みを紹介しながら、今後の取り組みに向けた提案を行った。県内最大の温泉宿泊地であるあわら温泉、左義長まつりを中心に伝統祭事と自然の活用に取り組む勝山市、大河ドラマのゆかりの地として観光サービスが動き始めた福井市中心部、ふくいやまぎわ天下一街道事業の中で体験型観光を推進する丹南地区、海と文化を活用した観光活性化に取り組む嶺南地区について取り上げたが、それぞれの地域でゆっくりとではあるが、地域資源を見つめ直し、これを活かそうという取り組みが進みつつある。

観光活性化の尺度は、単年度の入込客数ではなく、継続した取り組みによるリピート訪問だけでなく、地域産の商品の継続購買などを含めた掛け算による経済効果をどう発揮するかにある。地域の新たなファンをつくり、将来その地域に住みたいとまで思わせるような魅力を感じていただくには、地域住民自身がその魅力をしっかりと意識し、伝える役割を果たさなければならない。

一朝一夕で進むことではないが、まず第一歩を踏み出さないと到達できないし、また企業や地域がバラバラの方向に向かっていても効果は表れてこない。当支部では、県内各地域の観光ビジネス活性化に向けた方向を見出し、第一歩を踏み出すための支援に取り組んで行きたい。